

研究と実践の整理(下)

——具体的事例に見る教職支援の成果および課題——

教職支援センター 森田 薫

抄録

教員の大量退職の時代に入ってきている。そうしたなか、今後の教員養成のあり方を考える際に大きなテーマとなるのが、大学教育機関が学生に「実践的指導力」、つまり「教育現場での即戦力の力」をどのようにつけさせるのかという課題である。今、教育行政はある種の危機感を抱き、教職人材育成システムを構築し進化させつつあるが、大学においてもこれに呼応する教職支援システムと支援内容の質的向上が求められている。

本稿では、以上のような問題意識のもと、筆者が教育支援を実施した 18 枚（名）の学生の教採合格奮闘記のなかから一つの典型事例を選択し、それに焦点を当てて分析する。こうした事例分析の意義は、教職支援センター内の教師塾（通称「森チル」）がどのように学生に影響力を及ぼしてきたか、また学生個々人がもつ可能性をどのように引き出してきたかを検討することで、筆者の研究テーマである「教師力の基盤づくり」の可能性について考察することである。

キーワード

①教職支援の事例分析、②大学での教師塾のあり方、③教師力の基盤づくり、④学生のインサイド・アウトの生き方

1. はじめに

私は 5 年前に教職支援センターに奉職した。5 年間の主な業務は、①教育実習訪問指導、②面談や教師塾での学生への教職支援、③特別支援教育指導法に関わる講義であった。研究テーマは 1 年目、2 年目と少しずつ文言が違っているが、大筋で述べると「大学における『教師力』養成過程の研究」と「大学における教師力の基盤づくりの研究」となる。

本稿ではこうした私の研究課題を検討するために、私がこれまで従事してきた「面談指導」および「教師塾」（通称「森チル」）が、学生に対してどのような影響力を及ぼしたかについて学生の典型事例をとおして分析することにしたい。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、「2.1 事例内容『英米学科から特別支援学校へ Hop Step Jump!!』」を見る。次に「2.2 事例（手記）の分析」では、学生 M の大学入学時からの学生生活そのものと、現役学部生時代と通信教育部時代の学習経過から、私が実践してきた「面

談指導」および「教師塾」の成果と課題を探ってみた。そのうえで、つづく「3. まとめ——教師塾（「森チル」）の成果と課題」では、教師塾の教職支援内容の有効性と大学内に教師塾をつくるメリットについて言及し、最後の「4. おわりに」では本稿全体の議論を手短に整理する。

2. 教員採用試験の「合格奮闘記（手記）」の事例と分析

本稿では、私が教師塾のなかで教育指導を実施してきた全 18 名の学生のなかから、学生 M（佛教大学卒、通信教育課程修了）の手記（「教採合格奮闘記」）を分析事例として取り上げる。18 名のなかから筆者がこの学生 M を代表例として選んだのは、次のような理由による。

①大学入学の志望動機および高校時代の状況からして、佛教大学入学者の「平均的存在」ととらえられる。

②中学校の 3 年間は吹奏楽部所属、高校 3 年間は茶道部所属というように、いわゆる文化系の学生の典型と考えられる。

③前向きな学生生活を送り、自己の変革やエンパワーメントを進めた事例である。自分はどこから来てどこに行くのかという課題、つまり E.H エリクソンの言う「自己同一性（self-identity）」、「連続性（continuity）」、他者や社会のなかでの私はどのような存在なのかという「心理社会的同一性（psychosocial identity）」、「斉一性（sameness）」といった青年期の発達課題（注 1）、「自分探し」、「アイデンティティ形成」をした事例だと考えられる。

④1990 年以降の新しい時代の「インサイド・アウト」（注 2）（2004 溝上）による生き方をしており、自己実現の道として教員採用を選んだ典型事例ととらえられる。

⑤現役 4 回生（1 回目）、卒業後通信教育部学生（2 回目）の 2 年間にわたる教採受験の奮闘記録（軌跡）がわかる。

ここでは A4 用紙 4 枚分という長文にはあるが、学生 M の手記の全文を引用する。彼女の大学入学時からの学生生活の送り方や自分さがしの軌跡（3 年間）と、私の教師塾（「森チル」）と出会った教採合格前後（2 年間）の合計 5 年間を振り返る。なお、本手記に対しては項目ごとに筆者が小見出しを入れ、教師塾の成果と課題をわかりやすく表記した。

2.1 事例内容——「英米学科から特別支援学校教員へ Hop Step Jump!!」

1. 大学入学の動機

私が採用試験に合格するまでの学生生活と通信学生生活を振り返り、自分の軌跡を奮闘記としてここにまとめたいと思う。

初めに、佛教大学英米学科生として過ごした 4 年間をふりかえっていく。入学した当時の私に言えることは、将来の夢や何がしたいのかといった 4 年間での目的・目標を全く持っていな

かったということだ。なんとなく英語が好きで、なんとなく佛教大学に入ったといってもいい。

しかし、今思えば、やりたいことが特になかったからこそ、出会ったこと・出会ったもの・出会った人全てに新鮮さを感じ、好奇心を持って幅広く取り組むことができたのだと思う。大学生活は、自分が今までで一番大きく成長できたと実感できる期間だった。

2. 文学部英米学科での勉学

これから、具体的に振り返っていく。まずは、英米学科生として英語に関する勉学に励んだ。何事も自分が納得するまでやり続けるという私の性格上、講義では極力寝ることは我慢し、レポートやテストは期限ぎりぎりまで粘り、完成度の高いものを提出してきた。ゼミレポートとして、後半の2年間はチャップリンについて書いてきた。特に人にとっての「笑い」をテーマとしてきたので、特別支援学校教員として少なからず活かせる部分はあると考えている。このような努力が実を結び、成績優秀者として賞状や賞金をいただいたり、首席として卒業することが出来たのだと思っている。この経験を通して、努力すれば何らかの形で必ず認められる、頑張る自分の姿を必ず誰かが見てくれているのだということを学んだ。

3. スポーツサークルのマネージャー経験

次に、4年間のスポーツサークルでのマネージャー経験も私にとって大きなものだった。ほぼスポーツの経験がない私が、アルティメットという生まれて初めて見るスポーツに興味をもったのも、サークルの雰囲気があたたかく、先輩たちが楽しそうにプレーをしていたからだと思う。先輩の話は本当に楽しく、学ぶことも多かった。一方で、マネージャーの仕事は、ドリンク作りやスコアラー、タイム係など地味な仕事が多かった。選手はいつも楽しそうに見え、マネージャーは感謝されることも少なく坦々と仕事をこなし、一時期は悩んだときもあった。しかし、マネージャーの経験を通して、ヒトは誰でも陰でいつも誰かに支えられているのだということ、そしてたとえ些細なことであっても、物事に不可欠なことはいつも誰かがしてくれているのだということを学んだ。そして、大切な仲間や友人を作ることもできた。

4. 特別支援学校の教員になろうと決心した出会い

2回生の終わり頃に、「特別支援学校の教員になろう」と決心した出会いがあった。それは、友人の紹介で始めた家庭教師のアルバイトで出会った発達障害の男の子である。小学校低学年のS君は、多動と不注意が激しく、奇声を上げながら殴る蹴るを繰り返す彼にどのように関わっていけば良いのか分からず、毎回悩み苦しんだ。勉強を教えに行っているはずなのに、1時間ボール投げをして終わったこともあり、その子のお母さんに対して申し訳なく思うことも多々あった。

一時期、勉強を始める前にS君がポケットティッシュを机一面に並べてから、それらを積み

重ねるという儀式的な行動をし始めた時があった。最初は、その行為をやめさせようとしてばかりいたが、途中から黙って見ていると、彼はその行為をしてからなら勉強に意識を向けることが出来るのだと知った。つまり、**S 君**は、自分なりに気持ちの整理を付けて、勉強に臨もうとしていたのだ。**S 君**の事を知るのに半年という時間はかかったが、「見守る」「待つ」という意味が理解出来た。そして、家庭での **S 君**の様子、クラスや友人と **S 君**の関わりなどを見聞きしているうちに、すごく彼を愛らしいと思うようになり、私の心が穏やかになっていくような居心地の良い感覚を覚えるようになった。約 2 年半の彼との関わりが、それまでの私の人生を変えたといってもいい。子どもと関わることに楽しさを感じたこの出会いをきっかけに、数々のボランティアなどをするようになった。

5. 数々のボランティア経験で得たもの

例えば、外国籍の子どもへの日本語指導ボランティア、異文化交流のクリスマスパーティースタッフ、外国人への書道教室スタッフ、児童療育センターボランティア、中学校インターンシップ、特別支援学級ボランティア、特別支援学校ボランティアなどがそうである。外国籍の子どもやその保護者などに関わることは、学校現場での文化の違いによる問題点や課題を知ることができ、インターンシップや特別支援教育での関わりは、現代の小中学生の実態や様子、施設から通う子どもたちの心の動きまでも身をもって知ることができた。特に、桃山養護学校でのボランティア経験は特別支援学校の教員を目指していた私にとって学ぶことが多かった。自閉症児への視覚化・構造化といった **TEACCH** プログラム（注 3）の技能・技法や、授業での教材・教具の在り方や発問の仕方、教師の子どもへの関わり方など基礎的な土台をここで身につけることができたと思う。その他にもボランティアの先々で出会った人たちから学ぶことは多い。自分から働きかけて得たものは心に残り、今でもつながりのある人はたくさんいる。ボランティア経験は私の知らない世界を広げ、様々な人と出会うことで私自身も幅広い考え方や知識を持つきっかけとなった。

6. 3 回生、教員採用試験の準備開始

ボランティアなどと並行して、3 回生の頃から教員採用試験に向けて勉強会などにも積極的に参加するようになった。例えば、滋賀県の主催する滋賀の教師塾、現役教師の実践報告会、大学での授業研究会や英語会、佛教大学教師塾、卒業後もお世話になる森田薫先生が開かれる森田塾などである。このすべてにおいて共通して言えることは、同じ目標を持つ仲間がいたから私は頑張ることができたということである。授業研究会や英語会では **1 学年上**の先輩に指導していただくこともあり、同回生の仲間以外からも刺激を受けることができた。主に、模擬授業や面接練習、各自治体の情報交換など行い、切磋琢磨し合ってお互いをたかめてきた。

7. 4 回生教採受験 1 回目「お試し受験」の反省

ここで 1 つの私の反省点を取り上げたい。4 回生の夏、私は中学校の英語で滋賀県の教員採用試験を受けた。本気で英語の教員になりたいとは思っていたわけではなく、雰囲気を知るだけでも来年の勉強になるだろうと軽い気持ちで受けた受験であった。森田塾にも月に 1 回行くか行かないくらいであった。勉強は、教職教養をメインに一般教養と専門教養（英語）をそこそこしただけで、試験直前にも関わらずテレビを見たり漫画を読んだりしていた。当時の私は、「自分は英語の教員になるつもりはないのだからこのくらいでいいや」という気持ちが強かった。しかし、その考え・その行為は、真剣に受けている他の受験者に対して大変失礼で身勝手なものであった。今になって思うのだが、毎年死ぬ気で勉強し必死になって夢をつかもうとしている人がある隣で受験した私は、同じフィールドに立つ資格すらなかったのだ。今年の受験で、必死になってつかみ取った合格だからこそこのことが実感できた。お試し受験などは、これからもするべきではないと痛感した。

8. 大学卒業後通信教育部在学・教採受験 2 回目の勉強

これから、大学卒業後の勉強生活について振り返っていく。

私は、特別支援学校などでの講師をせずに勉強一本の生活スタイルを選んだ。それなりの覚悟はしていたが、始めてみると朝から晩までの勉強は本当に苦しかった。ヘルペスになったり、バーンアウトしかけたときもあった。それでも、努力しなければならない立場にあり、とにかく毎日が必死だった。私の友人は皆、社会人になっており、自分だけが取り残されたような焦燥感に日々駆られていた。一方で、卒業旅行での友人の写真を部屋中に飾り、元気やパワーをもらっていたのも事実である。

9. 教師塾（森田塾＝「森チル」）での勉強内容

森田塾での勉強内容・勉強方法について、触れていきたい。私は佛教大学の通信教育課程に入学した 4 月から本格的に森田塾へ行くようになった。

初めは教職教養、一般教養、専門教養（特支）の問題集を解きながら、ノート作りを行った。ノート作りは、障害種別や項目毎に「定義・概念→原因→状態・心理的特性→具体的支援方法」の流れに沿って行った。私自身、楽しく一枚一枚作ることができた。なぜなら、あいまいな知識が整理され、文字を書くことによってより記憶にのこっていったからである。そして、ほぼ毎行われた森田先生によるミニ講義は、大学の他の先生の講義以上に学ぶことができた。先生の実体験に基づく講義は資料とともに聞くことができ、大学の講義よりも先生との距離が近いため質問したりして毎回のテーマについて染みつくまでとことん学んだ。一次試験が近づいてきたら、面接練習もやり始めた。ネコシート（学生 M 作）と呼ばれるシートに、質問項目と自分なりの解答を書き出した。項目数は、50～60 あるかもしれない。このネコシートづくりに

役だったのが、4月から作成してきたノートである。面接項目に関連することについて、ノートにまとめたことを書き出して、より専門的なことを知識として言葉で言うてみるのである。また、論文対策も行ってきた。テーマについて「つかみ→展開→まとめ→パンチ」の流れに沿って書いて、書き直して、書き続けた。書いたら書いた分だけ自分のものになり、面接のときに自然と言えるようになっていたことには自分のことながら驚いた。

それらを踏まえた上で、二次試験の模擬授業対策を行ってきた。私の場合、特別支援学校の受験枠でありながら英語での授業にかなり戸惑った。発達年齢は通常の中学生、高校生と変わらない肢体不自由児が模擬授業の対象児になるため、イメージが描けずに自分の授業スタイルが確立するまで時間がかかってしまった。最終的に多大な仲間の力も借りながら、「リズム発音→本時のねらい→アクティビティーの説明」という学生 **M** スタイルを見つけることができた。神奈川県で行った模擬授業「はらぺこねこ」は、他の人に見てもらったり、デジカメで録画して自分で見直すなどして、**10** 回以上練り直して完成させたものである。

10. ともに夢をもつ仲間の存在

こんなにも森田塾でがんばれたのは、他ならぬ共に夢を持つ仲間がいたからである。メンバーの **9** 割が現役の四回生で、年上に当たる私は正直不安に思うところもあったが、一切の壁を感じることなく誰もが仲良くしてくれたのは本当に嬉しかった。苦手な勉強面ではお互いに教え合い、面接練習や模擬授業では森田塾のない日にも集まってわいわい言いながら、意見を言い合ったり発表し合ったりした。この経験こそが、私を大きく成長させてくれた。それは一人では決して出来なかったことだとも思う。自分が気づくことのできない部分を的確に伝えてくれるのは、仲間が私のことを私以上に見てくれているからであって、一つ一つの意見が本当に嬉しく感じ、他の人の模擬授業などを見ることと併せて大きな勉強になった。日々の勉強が辛くなったときや嫌になったときも、「森チルのみんなが頑張っているのだから、私も頑張らなくては！」と思い、何度も机に向かった。森チルのいない森田塾は考えられない。また、森チルのいない私は考えられない。このメンバーに出会えて、そして仲間になれて本当によかったと心から思う。

11. 家族の協力と支え

さらに、4月からの半年間、私が勉強漬けの毎日を送ることができたのは、家族のおかげでもある。本来なら家事や炊事など私が行うべきところであったが、偶然にも **4** 月から退職した母親が代わりに行ってくれたり、私が勉強に集中できるように家族全員が極力配慮してくれたり、環境にも本当に恵まれていたと思う。ときには、それぞれの仕事があるにも関わらず、家族をも巻き込んで面接練習をしたり、模擬授業をしたりもした。自分だけの努力では「合格」の二文字は手に入れられなかったと断言できる。お父さん、お母さん、そして姉に心から感謝

したい。

12. これまで、今、これから、Hop Step Jump!!

このように、大学時代から何気なく取り組んできたこと全てが一つの形となって今の私を作りだしているように思う。今振り返ると、細かいことも含めて全てに意味があったのだと実感する。教員採用試験に合格するまでは長い道のりであったが、それはスタート地点に立ったに過ぎない。これから先は、森田先生も森チルのみんなも家族もいない。自分の力で一步一步切り開いていかなくてはならない。講師経験も社会人経験もない私には、確かに不安や緊張が尽きないほどある。けれど、今まで学んできたこと、出会ってきた人、経験したこと全てがこれからの私の血や肉となっていくものと信じている。一年後、五年後、十年後の私は今の私とは違った自分になっていると信じたい。一年前の自分、五年前の自分、十年前の自分には恥じないように、これからも私のペースで“Hop Step Jump”して前に進んでいきたいと強く思う。

最後に、私を一から指導していただいた森田先生と、私の仲間である森田塾のメンバー、そして家族をはじめ、お世話になった方々に心から感謝を申し上げたい。本当にありがとうございました。

平成 23 年 12 月 13 日 M

2.2 事例（手記）の分析

以上の学生 M の事例内容について、1 から 12 の項目にそって考察をおこなっていく。

1. 「大学入学の動機」についての考察

学生 M は、入学時に「将来の夢や何がしたいのかといった 4 年間での目的や目標を全く持っていなかった」、「なんとなく英語が好きで、なんとなく佛教大学に入った」と書いている。大学が大衆化した今日、一部の医学部や看護学部等の専門学科および学部を除けば、どこにでも見られる「普通の学生」の姿であろう。自分の身の丈に合わせて大学を選んだ感じである。しかし、「大学生活は、自分が今までで一番大きく成長できたと実感できる期間」だったと書いている。「放っておいても、大学生は自ら研究テーマを見つけて学び始める。——そんな時代があったとすれば遠い過去のものだろう。大学生は、入学試験に合格すれば、そのまま「大学生になる」のではない。入学前に教育を始める大学が目立ってきた。推薦入試など、筆記による学力試験を経ない新入生が多数派を占める大学が増えているからだ。入学してからも、学び方の学習、学ぶ動機づけの鼓舞、メンタル面でのサポートなど、大学は、入学した学生を「大学生にする」ために奮闘している。それはまさに、手取り足取りと言ってもいいほどだ——中略——大学生は『つくる』ものなのである」（2009 読売新聞教育取材班）とも言われている。この学生 M がどのような学生生活を送り、成長していったのか。学生自身の主体形成、仲間（学友）の存在、教員の学生支援の在り方等も考えさせられる。

2. 「文学部英米学科での勉学」についての考察

この学生は、所属する学科やゼミでどのような学習態度だったのだろうか。手記には講義で「寝ることは我慢」し、レポートやテストは「完成度の高いものを提出」してきたとある。学生の大学生活や勉学態度の「鏡」のようである。しかし、言うまでもなく「アルバイトで深夜まで居酒屋で働いている」とか、「クラブ活動で疲れている」とか、「2 時間かけて通学している」などの事情もあり、全ての学生がこのように勤勉とはいえない。学生 M が現実に自己の学生生活を振り返り、先のようにきっぱりと言っているのには驚かされる。各大学が FD（授業評価〔アンケート等〕に基づく授業改善の組織的な動き）を進めているが、こうした受講する学生側の注意喚起の姿勢と相乗して効果があがる。ここで佛教大学の「FD Review vol.6、2010 年度の総括」の春学期授業アンケートから、開講課目集計（共通課目）をみてみよう。「あなた自身の取り組みについて」に注目すると「熱心に授業に取り組んだ」の質問に対して、「5、大いにそう思う」（29.9%）、「4、そう思う」（36.2%）、「3、どちらともいえない」（24.7%）、「2、あまりそう思わない」（5.5%）、「1、全くそう思わない」（2.6%）、「無効」（0.4%）となっている。その他にも「1 回の授業につき、予習・復習した」や「自分で調べ、考える姿勢をもてた」等の項目がある。

学生 M なら、上記のいずれの質問項目にも「大いにそう思う」と答えたことだろう。このような学生 M の学習態度が「成績優秀者」としての賞状授与や、首席での卒業という結果に結びついていると考えられる。また、ゼミでは「チャップリン」、「人にとっての笑い（＝ユーモア等）」を 2 年間研究した。本人は特別支援教育の実践に活かせる部分があるというが、一見すれば、教育現場での課題研究や問題解決には直接的に結びつくものではない。では、ただ一つの事を研究し深めることは教師にとってどのような意味があるのか。斎藤孝は「研究者的態度」に触れて「教育力の一つに『研究が面白くてしかたがないと感じていること』を挙げたい。教師の中には研究をしない人もいると思う。たとえば自分がある程度の知識を身につけていて、それを卸問屋のように年の若い未熟な人達に『卸して』いく。そうするとべつに研究を深めなくても、教師は一応できるわけである。その考え方の効率が良ければ、それで問題がないともいえる。ただし長い目で見たときには、その教師自身が研究者でもあるという一面を持っているほうが、いい教師になるという実例を私は見てきている」（斎藤 2007）と述べている。

また、柳谷晃は『『教えるのはすべての範囲だから、ある一部分の専門の勉強をした人には全体を教えることはできない。』そう考えていたらそれは間違いである。一つのことを一生懸命勉強することによって、勉強するということの方法を学べる。だから知識は広くなくても、勉強するための基本的な態度ができる。だが広く浅く知識を付けるだけの教育を受けた学生は、このことを理解できない』（2009）と辛口の意見を述べている。特別支援学校での私の教師観としても「心理士資格をとって、地域の学校への巡回相談チームで活躍する教師」、「発達検査を

研究している教師」、「子どもの詩にメロディーをつけ、作曲する教師」のように、教育実践の充実と同時に、研究テーマを研究的態度で追及していた教師は押し並べて優れていた。

私は、この学生が教育実習で実施した学習指導案（「スイートポテトを作ろう」、肢体不自由児対象、中学1年生、つくるえがく）をもらい大学で模擬授業（再現）したが、子どもの興味や関心、意欲を高め、現代と将来の子どもの生きる力（自立と社会参加）に結びつく優れた内容だった。教育実習後、指導教諭からは「実習生でここまでやった人は、あなたが初めてだ」と評価されている。このように英語学科での研究姿勢が、別のテーマの研究にも転移している。

3. 「スポーツサークルのマネージャー経験」についての考察

学生Mは中学校時代に吹奏楽部、高校時代には茶道部に所属しており、明らかに文化系の学生だといえる。では、なぜ大学入学以降、スポーツ系サークル（アルティメット）のマネージャーになったのだろうか。その一つの理由には、手記冒頭にあるような好奇心の旺盛さ、つまり、「見たがりや、聞きたがりや、知りたがりや、やりたがりや」の性格と姿勢があげられる。佛大生全体にもこの傾向が強い。特に教職志望の学生に小・中・高の活動経歴を聞くと、クラブ活動や生徒会活動、地域行事、ボランティア活動への参加等を行い、他の人（子どもを含む）との関わりのなかで、豊かに自己の性格やキャラを作ってきた学生ばかりであった。教師になるにあたっては必須の素質と言えるし、教員採用試験での自己の「ウリ」の一つになっている。

ここで少し視点を変えて、脳科学者と社会学者による最新の知見を見てみよう。脳科学者の藤井直敬は「この実験が示しているのは、われわれの行動の動機づけとなっているカネの影響と、社会的な報酬つまりホメの間には、共通の神経メカニズムが働いているということを示しています。ホメはカネでばかり動いていると思われている社会を動かしている、もう一つの隠れたエンジンなのではないでしょうか。しかし、ヒトの脳がホメをカネと同じように扱っているというのは、一見驚きのように思えますが、良く考えたら別に不思議なこととも思えません。なぜなら、私たちの脳は、現在のようにカネ主体の社会以前から存在していたわけですし、その中では何らかの行動を動機づける要素が必要だったのです。僕は、そのような動機づけを行う要素が社会的関係欲求だったのではないかと思うのです。もちろん、その欲求内容は一つではないでしょう。他者と関係を継続すること、他者から社会的に認められること、社会に奉仕すること、そういうことが僕たちを動かす原動力になっていると考えるのがおかしいことでしょうか。しかし、科学者は、そのような数値化出来ない要素についてはほとんど無視してきましたし、科学者がそれに言及すると奇異な目で見られがちでした」（藤井 2009）と言う。これは毎日出版文化賞（自然科学部門）を得ている最新の脳科学の知見である。

また、この点と関連して社会学者の鈴木謙介は、『震災が起きて、僕たちは、人間関係を重要視するようになった。この話は、本当でしょうか？実は僕は、ここまで述べてきたような、人とかかわりを重要視するという傾向について、震災が起こる前から考えていました。何も多

くの人が、震災を機に急にかんがえを変えたわけではないのです。これまで少しずつ考えてきたことが、震災によってはっきりと目立つようになり、以前よりも急速に浸透しつつあるという印象です。つまり、人々が「絆」が重要と考えるようになった兆しは、震災よりももっと前の段階から芽生えていたのです』(鈴木 2011) と論じている。

こうした発想のもとで学生の「社会的関係欲求」、つまり他者との「つながり」や「かかわり」を理解すると、学生本人がすること、仲間や友人との間で進めること、大学教員の働きかけという支援の分業関係がより鮮明になると考えられる。ちなみに、学生 M にまつわる一つのエピソードを紹介する。私が「小さい頃や小・中・高どんな生い立ちやキャラだったのか？」と、この学生に聞くと「今度、私のキャラを最もよく表した小学 1 年生の時の入選した詩を持ってきます」と言った。そして持ってきてくれた詩は、「こころがふっくら」(平成 7 年度 S 小学校 1 年、M) と題した次のようなものだった。「みんなでむしばんづくりをした。ちづるちゃんと、あらいものをした。ボールにたまごをわって、かきまぜてこむぎこをいれてまたかきまぜた。みんなでたべたら、こころがふっくらした」という心があたたかくなる詩であった。私もお返しに、今、メディアで注目されている柴田トヨ(当時 98 才)の「くじけないで」の心あたたまる詩集を貸した。もともと友達や仲間と一緒に何かすると、「こころがふっくら」する性格であり、それが大学で一層開花し発展したと考えられる。

4. 「特別支援学校の教員になろうと決意した出会い」についての考察

この部分のエピソードを読んで、2 年半の彼(自閉症スペクトラム児)との家庭教師としての付き合いは困難をきわめるものだったと想像できる。「ご苦労様でした」と言いたい。もし自閉症の障害特性への理解と、それに基づく具体的支援方法、実践的指導力を身につけていたら、「儀式的行動=こだわりの一種」への理解や、子どもの成長や発達のために「見守る」ことや「待つ」ことの大切さ、行動障害(「多動」「不注意」「奇声」「殴る蹴る」「パニック」等)への対応の仕方、言葉以外のコミュニケーションの取り方や伝達方法、さらには「クールダウン」の効果的な取り方等がより早期に取れたことだろう。今の学生 M の指導力なら容易に出来るはずである。しかし、学生 M の実践の優れている点は、思考錯誤を繰り返しながら、逃げ出さずに正面から向き合ったところである。そして、彼(自閉症スペクトラム児)の良さを引き出し「愛らしい存在」ととらえ「心が穏やかになっていくような居心地の良い感覚を覚える」ようになっていくのである。特別支援学校の重度の子どもの担任が、子どもを「背中に羽根のついている天使」と例えるのに似ている。平たくいうと教師に求められる資質とは、①子どもへの愛情、教師の使命感等、②専門性、実践的指導力等、③他人と関われる総合的人間力等、④体力、気力の 4 点である。しかし一番大切なことは、「子どもが好きで好きでたまらない」という子どもに対する愛情と思い入れである。現実にはしんどいことや苦しいことが 9 割あっても、後の 1 割の楽しい事で疲れが吹っ飛ぶのである。愛情が持てるからこそ、子どもを成長、発達

させる方法が出てくる。困難な場合でも子どもを救うノウハウやマニュアル、教育の方法、知恵が生み出されるのである。当時、この学生は子どもが多動であるとかパニックを起こすとか、その原因や背景もアセスメント（実態把握、分析、評価等）することが出来なかった。十分な障害特性への予備知識がないなかでこの子どもと真に向き合い、最後は「天使のような存在」ととらえていったのである。だから「約 2 年半の彼との関わり」が「特別支援学校の教員になろう」と決意させ、その後の人生を変える契機になったと考えられるのだ。そして、「彼との出会い」と教訓から数々のボランティアへの参加が開始され、「実践知」（経験等）と「理論知」（本、文献、研究会参加等）が統一された教師力の基盤がつくられていくのである。

5. 「数々のボランティア経験で得たもの」についての考察

ものすごく多種多様なボランティア経験である。先の「彼＝自閉症スペクトラム児」との出会いがきっかけになり、学生 M のバイタリティーを生み出している。多国籍の子どもや保護者、異文化交流、中学生、特別支援学級、特別支援学校と多岐にわたる対象から、実態の違い、考え方や文化の違い、心の動き、個別の支援方法、授業づくり等を学びとっている。そして、その事が「知らない世界（＝視野）」を広げ「幅広い考え方や知識を持つきっかけ＝専門性等」となったという。特に、私もすすめた桃山養護学校では、自閉症スペクトラム児の有効な支援方法である TEACCH プログラム（注 3 再掲）や PECS（注 4）の技能、技法、授業での教材・教具の在り方、発問の仕方など即戦力の教師力、実践的指導力を身につけている。その当方で 20 代の若手教員が 40 名以上働く特別支援学校の現場で、若手教員の成長を目の当たりにして“まなび”への触発も受けている。この点に関連して、20 代から 30 代の若者層の幸福度を内閣府経済社会総合研究所で調べると「約 6 割が震災後、人生観になんらかの変化があったと回答し、特に結びつき重視の傾向が上昇した」、「今の 20 代や 30 代前半には揺り戻しがあり、周りとの協調性を大事にしたいという傾向」があるという（『毎日新聞』2012 年 1 月 18 日付、「識者に聞く（下）」）。

学生 M もボランティアを通じた社会との関係性のなかで、自己の存在の分析、自分探し、自己実現の道確かめていった。だから、学生 M にとって数々のボランティア経験は、他人への助っ人という意味とともに、良い教師になりたい自分自身のためのものであったろう。

「6. 3 回生、教員採用試験の準備開始」および「7. 4 回生、教採受験『お試し受験』の反省」についての考察

滋賀県の教師塾、現場教師の実践研究会、大学での授業研究会（サークル）、森田塾（「森チル」）に参加し、他の学生から受験情報をもらったりして受験勉強を開始する。ここでも学生 M が仲間から自らの学びに対して非常に大きな刺激を受けていることがわかる。しかし、学生 M は、特支免許取得は次の年（卒業後の通信教育課程）であったので、中学校（英語）の教員

採用試験を受ける事となる。本命は次の年の特支学校教員採用試験であり、中途半端となり動機的にも怪しかった。その結果、「お試し受験」となってしまう。「お試し受験」とは私の造語であるが、「大した受験準備や勉強をしないで一つの経験として受験すること」を言う。学生Mの場合、教採中学校（英語）受験でも1次試験を合格するか、それに近いラインまで達すべきであり、その事をベースに翌年の合格に近づけるというのが常套手段であろう。一般教養や教職教養のマークシートはどの試験でも共通でもあった。

この学生は「試験直前にも関わらずテレビを見たり、漫画を読んだりしていた」のである。後に「今になって思うのだが、毎年死ぬ気で勉強し必死になって夢をつかもうとしている隣で受験していた私は、同じフィールドに立つ資格すらなかったのだ。」と反省するのである。

私は常々、教員採用試験はマークシートの力、多様な能力や教師力、資質や人物性、伸びる可能性の有無等を査定する公務員試験のなかでも変わった試験であると言う。平たく言えば、その人の全てを可能な範囲と方法で公平に計る試験だと言える。教師経験を持つ既卒の現場の講師とも競争する。国立大や他の私立大の学生との競争ともなるのである。そんななかで、学習環境の恵まれている4回生での受験は合格するか、それに近いライン（＝落ちていても、ギリギリ）に達するように努力するよう言っている。そうする事によって、翌年（しばしば講師などをしているが）には必ずと言ってよい程合格出来るのである。2011年度（2012年度採用）のある北陸地方の国立大学教育学部の現役合格率は6%と言う。またその県のある特別支援学校の講師30数名で合格したのは、森チルメンバー1名を含む3名であった。他校よりも多い方だと言われているという。以前より採用人数が増え、倍率が下がる傾向でもなお厳しい現状である（ただし、近畿地方などの都市部ではやや広き門になっている）。学び易い学生時代にこそ、受験のための時間を独自に確保し、学習方法を確立し必死に努力する事が必要である。その意味で、講義の無い空き時間の活用、バイト・クラブ・サークルとの両立の姿勢、時間調整と工夫、テレビ視聴時間への注意、アルコール類の節制、友人や受験仲間との協力、受験勉強による負荷やストレスの抜き方等、細かな助言をしている。これは、厳しい勉強を経験せず、公募入試等で楽に大学に入ってくる学生が増えたなかで、「そこまで言うの」ではなく必要な事柄である。学生の中では、「今まで試験という試験で良い目をした事がない」と苦笑いしながら話す学生も見られる。そこまででなかったも、どこか難関大学へのコンプレックスを持っている学生も多い。教師になりたいなら、子どもを教える仕事に就きたいなら、「自分の変革」（＝アウフヘーベン、上へあげること）をなさいと言う。4回生での「お試し受験」は講師等になった次の年に積み上がらないし、いわゆる「落ちぐせ」につながり易い。私の教育現場での15年間の校長経験の中でも、講師（教師）としての実践力量も高まっており児童生徒、保護者からの信頼も厚いのだが、何回も落ちてしまう「教採受験に弱い講師」を何十人と見てきた教訓でもある。

8. 「大学卒業後、通信教育部在籍」についての考察

この学生 M は家の理解もあり、講師をせず「勉強一本の生活スタイル」「朝から晩までの勉強」を始める。そして、週 2 回は森田塾（森チル）に通う。そうした中で「ヘルペスになった」り「バーンアウトしかけた」と書いている。これは、一見学生 M だけの特殊な事例のようだが、多くの教採合格者に共通する心身症（ストレスなどの心理的な原因による身体疾患）である。佛大生だけの現象でもない。2011 年度の事例でも、学生 A は「他の人の勉強ぶりに触発され、焦って来て、勉強時間を増やしたが、今まで一度も経験したことのない咳、喘息の症状が出てきて医者に行った」と主訴した。学生 B は「勉強していると、手のしびれが出て来てとまらない」、学生 C は「下痢症状（大腸過敏）がくり返されるようになって来た」学生 D は「勉強していると吐き気がしてくる」と訴えていた。ある学生は手記に「吐くほど勉強したが、あんな経験もう二度としたくない」と書いていたが、これはまさに現実なのである。その他にも胃痛、頭痛、過換気症候群等もあった。精神的なあせり、落ち込み、心のもつれ、心のもやもや、バーンアウト等の心理的葛藤が繰り返し出てくる。ストレスに対応してこれを低減しようとするコーピング（対処行動）を必要とする。

森田塾（「森チル」）では、学生の心の相談、ストレスのゆるめ方への助言、生活改善（睡眠、食事、飲料水、入浴、音楽視聴、散歩、体操、ヨガ、ストレッチの工夫等）、認知行動療法による面談、行動理論による強化子（＝ごほうびを用意して 1 週間単位で頑張ること）の活用等を行って対処した。私が臨床発達心理士資格を持ち、多くの児童生徒や学生、保護者、教師等に対しての実務経験を積んできたことが役に立った。学生 M は「焦燥感に日々駆られていた」なかで「卒業旅行での友人の写真を部屋中に飾り、元気やパワーをもらっていた」と自己のメンタルヘルスを保った経験を述べているが、これも一つの有効な方法である。

9. 「教師塾（森田塾＝森チル）での勉強内容、勉強方法」についての考察

森田塾での主な勉強内容および方法は、①一般教養、教職教養、専門教養のマークシート類の勉強に対する助言、点検 ②ノート作り ③ミニ講義で教師になるための知識、理解、具体的指導支援方法を習得させること ④面接（個人、集団）の対策 ⑤模擬授業の対策 ⑥メンタルヘルスへの助言の 6 つである。

その内容や手法は拙稿（森田 2010）で詳しく書いてきた。学生 M は、卒業後（通信教育学部在籍）の実質 1 年遅れで森田塾に参加したのであるが、「森チル」の学習がこの学生にとってどのような効果があったかを中心に述べている。ノート作りは「楽しく 1 枚 1 枚作ることができた。その理由としては、あいまいな知識が整理され文字を書くことによって記憶に残っていった」と書いている。ミニ講義については「先生の実体験に基づく講義は資料とともに聞くことができ、大学の講義よりも先生との距離が近いため質問したりして毎回のテーマについて染みつくまでとことん学んだ」とある。面接練習では「ネコシート（この学生 M 作成）と呼ば

れているシートに質問項目（＝Q）と自分なりの解答（＝A）を書き出し」て「項目数は 40~60 あるかも」と言っている。ところで、この「ネコシート」とは、A4 用紙 1 枚の用紙に質問（＝Q）と解答（＝A）のスペースがあり、その上にネコの絵が描いてあるところからの呼び名である。下部には自己アピールに関するもの、専門性・実践的指導力に関するもの、教育法規に関するもの、時事問題に関するもの等の仕分けができるようにしていた。試験日が近づいてくると研究室の中に殺伐とした雰囲気が出てきたが、ネコの絵が学生の心を緩和してくれた。論文対策では、森チル独自の起・承・（転）・結の論理で「テーマについて『つかみ→展開→まとめ→パンチ』の流れに沿って書き、それを書き直すという。書いたら、書いた分だけ自分のものとなり、面接の時に自然と言えるようになった事には自分のことながら驚いた」と書いている。私が朝日新聞の『天声人語』等の論理展開を参考にして作成した、「森チル」独自の論文トレーニング法（600 字から 1200 字の論文作成）が効を奏した。

模擬授業対策は教採に合格できる程度でよいとするか、あるいは今後、教師になる際の授業づくりや、授業の技術の基盤づくりまで考えていくかどうかで、学生の研究姿勢が大きく違ってくる。また、模擬授業対策のあり方は、都道府県ごとの採用試験の実情により大きく異なる。たとえば、学習指導案の作成時間の違いはもちろん、教科の授業の場合や、学級活動や特別活動の場合、行事や父母懇談会等における講話の場合など場面ごとに様々な授業対策をしなければならない。また、授業の導入中心で評価される場合、展開の授業で評価される場合などの違いもある。一般に模擬授業の時間は、10 分程度が多い。

いずれにしても、「何を（＝学習内容）、どのように（＝授業の組み立てと授業技術等）、子どもの発達段階、理解の程度に即して教えるのか」が問われている。私の場合、「興味、関心、学習意欲の喚起→学習規律の徹底→導入時の契機→導入部分の場面理解→展開時の切り口の工夫→展開の組み立てと教科毎の本質の追及→授業の本質（集団思考等）の追及→まとめ、評価等」と授業を一定程度構造化するなかで、学生自身の持ち味を出させることに留意して模擬授業を行わせた。特別支援学校部門の場合、柔らかくて子どもにあまり圧力をかけない楽しい授業、パフォーマンスのある授業を工夫させた。学生 M が受験した都道府県の場合、特別支援学校部門で授業をするのであるが、基礎免許の英語で行うという珍しいケースであった。この学生は「発達年齢は通常の中学生や高校生と変わらない肢体不自由児が模擬授業の対象になるため、イメージが描けずに自分の授業スタイルが確立するまで時間がかかってしまった。最終的に多大な仲間の力も借りながら「リズム発音→本時のねらい→アクティビティーの説明」という M（この学生）スタイルを見つけることができた」とある。私は今まで佛大 5 年間で 100 名以上の模擬授業を指導してきたが、英語での特別支援学校部門の指導は初めての経験であった。この「リズム発音」とはこの学生の全くのオリジナルである。小学校の外国語活動の導入場面、中学校の英語の歌やゲームの利用、クラスルームイングリッシュ、発音練習の復習、授業入り口での興味や関心、意欲の引き出し方、英語授業でのリラックスの工夫等を考えてこの学生が

創意工夫したものである。こうした教育実践開発は試験の合格に役に立つばかりか、今後の教育現場でも活かせるのである。

「10. とともに夢をもつ仲間の存在」および「11. 家族の協力と支え」についての考察

学生 M は、手記全体の中に「仲間の存在」を何度も挙げている。ここでも「苦手な勉強面ではお互いに教え合い、面接練習や模擬授業では、森田塾の無い日にも集まってわいわい言いながら意見を言い合ったり発表し合ったりした。この経験こそが、私を大きく成長させてくれた」と記している。仲間による切磋琢磨であろう。また、「日々の勉強が辛くなったときや嫌になったときも『森チルのみんなが頑張っているのだから、私も頑張らなくては！』と思い何度も机に向かった」とある。同じ立場にある仲間の存在、つまり苦しいのは私だけではない等の感慨が背中を押してくれたのであろう。このような励ましを受けた事により「森チルのいない私は考えられない。このメンバーに出会えて、そして仲間になれて本当によかったと心から思う」と結論づけている。

また、4 月から半年間、「勉強漬けの毎日を送ることが出来たのは、家族のおかげでもある」としている。家族が「勉強に集中できるように家族全員が極力配慮」してくれたり、「家族をも巻き込んで面接練習をしたり、模擬授業」をしたりしている。私はこの学生に「この前より随分模擬授業がよくなってきたね」という事があったが、本人の努力もさることながら家族の協力と支えがあったのである。他の教採奮闘記にもここまででは無いにしても、大なり小なり「バイト減らすからね」や、「コーヒーやデザートを差し入れてもらった」などの理解と協力があった。どの受験生も必死になる受験競争である以上、家族からの支えや励ましは心強いものである。

このように家族からの支援というテーマに関連して、「森チル」メンバーの一人の学生が『朝日新聞』（2012 年 1 月 21 日付、声欄「若い世代」）に次の手記を投稿していたので紹介する。

春から教員 試練を糧に成長

大学生 菅原 祐美子（大津市 22）

今年私は、夢がかなって教壇に立ちます。昨年教員採用試験を受け、地元の結果は不合格でしたが、神奈川県から小学教員の合格通知を頂きました。地元を離れる不安は大きいのですが、それよりも教育現場で働きたいという気持ちが強く、親元を離れることを決めました。

今まで両親がそばにいて、当たり前のように私を支えてくれました。お母さん、いつも体調を気遣っておいしい食事を作ってくれてありがとう。お父さん、帰りが遅くなったとき、いつも迎えに来てくれました。車の中でいろんな話をしたね。幸せな時間でした。

勉強や部活、アルバイトなど、いろんなことに挑戦できたのは両親の応援があったおかげです。春からはそんな応援団である 2 人と離れてしまいます。自分にとっての一つの試練だと覚

悟しています。いずれは地元に戻ってくるつもりです。そのときに、両親に大きく成長した私を見せたいと思います。見守って下さい。

ここでみられるのは、家族に対する「依存関係」からの自立である。他の学生にも共通する気持ちと考えなのであろう。

「12. これまで、今、これから、Hop Step Jump！！」についての考察

この学生は近畿地方の滋賀県と関東地方の神奈川県の特設支援学校部門の教員採用試験に合格した。「このように、大学時代から何気なく取り組んできたこと全てが今のわたしを作りだしているように思う」と言う。それは、教師になることの何らかのメリットを感じ、入学時から何が何でも教師になってやるというような 1990 年代以前の学生に多く見られた「アウトサイド・イン」（社会や就職に合わせて自分を作っていく）の生き方と就活姿勢でなかったからであろう。逆に、この学生の生き方は社会的関係性のなかで自分は何に向いているのか（自己分析と自分さがし）を一步一步着実に進めた事例だと考えている。だからこそ「今まで学んできたこと、出会ってきた人、経験した全てがこれからの私の血や肉となっていく」と感じているのであろう。実際、こうした自分の生き方にこだわって就活に成功する事例は、文系では教職希望以外には少ないようである。理想と現実のギャップがあったり、学業（専門分野）と職場の求めるものの接点が少なかったりするからであろう。この学生は「天職」が決まった今、「一年後、五年後、十年後の私は今とは違った自分になっていると信じたい」、「これからも私なりのペースで“Hop Step Jump”して前に進んでいきたいと強く思う」と述べて手記を締めくくっている。自分探しという長いトンネルをくぐって「我が身に、お日様をいっぱい受けているような光景」なのであろう。

以上、徹底的に個人の「ミクロ」な事例にこだわって教職支援の事例の考察をしてきたが、それ故に社会統計資料やデータとは違った知見が明らかになった。この点について、以下の「まとめ」で詳述することにした。

3. まとめ——教師塾（「森チル」）の成果と課題

本稿では限られた紙数のなかで、一人の学生 M の手記にこだわり分析してきた。事例（手記）の分析では、自分の生きがいや自己実現の道として教員採用を選んだ学生（典型例）の大学生活の送り方と、こうした学生に対するエンパワーメントの進め方に焦点をあてながら、「森田塾（森チル）」の意義について考察してきた。そこで、こうした考察を通して見えてきた「森田塾」の成果と課題について下記の項目でまとめる。そして最後にささやかではあるが、大学の教職支援のあり方と大学内で教師塾をつくる効用についても考えていきたい。

ア、森田塾（「森チル」）の合格実績について

一次試験の結果で言うと、森チルのメンバーのなかでは「落ちる学生」は例外的存在である。「落ちる学生」は個別の要因（志望動機の希薄さ、努力不足、心理不安定等）がある。一次試験はほぼ全員に近い 9 割以上が合格している。二次試験合格者は昨年度（2010 年）で 24 名、本年度（2011 年）は 14 名である。2 個所をダブって合格する者もいるが、採用人数（実数）である。いずれも現役学生、既卒性、通信教育部学生を含めた数であるが、二次合格率は 7 割程度である。合格先は、京都府、京都市、大阪府、大阪市、奈良県、滋賀県、兵庫県、和歌山県、福井県、長野県、名古屋市、静岡県、神奈川県、東京都等である。小・中・特支の校種にわたる。高校も 2 名いるが、私の関与が少ないのでカウントしない。ほとんどの学生は、教育学部以外である。教育公務員スクールや他大学とは比較していないが森チルの合格率は高い。私は森チルの勉強方法を他大学（非常勤講師の勤務先）の 2 名の学生に部分的に導入したところ、2 名とも一次試験までは合格した。

イ、学び方、学ぶ姿勢、研究者の態度の育成

他大学の卒業生で佛教大学の通信教育学部在籍のある学生が、手記のなかで「森田先生に会うまでは、森チルでは、面接を重点的に指導していただけたらと思うと感じていましたが、実際に先生にお会いし、色々と話をさせていただくうちに驚きました。筆記試験の勉強の方法や小論文を書くために必要な教育用語ノートづくり（注 5）など、昨年度にやっていた私の勉強方法が本当に“生ぬるい”物だったと思った」と記している。また、ノートづくりについて、「ノートの項目が増え、小論文や面接練習に取り組むうちに私は、用語や課題の詳しい内容を全く知らず、その状態のまま小論文を書いたり、面接に臨んだりしようとしていたのだということに気がつかされました」と述べている。極端に言えば、わけが分からないまま教採を受け、教師になろうとしていたのである。これでは、例え合格しても 4 月から即戦力にはとてもなれなかっただろう。研究者の態度の育成は教師塾（「森チル」）が教師になるための教採突破塾の側面がある以上、時間的にも内容的にも制約があった。しかし、研究者の態度を身につけるための基盤となる学びの姿勢を改善したり学びの意欲を高めたりするなど、「学生の学びの芯」に火をつけたのは確実であろう。

ウ、教育課題の解決の具体的支援方法、実践的指導力の育成

平成 18 年（2006 年）に出された「今後の教員養成・免許制度の在り方について（概要）」の中の「教員養成・免許制度の現状と課題」で「学生に身につけさせるべき資質、能力についての理解が十分でない」、「専門職業人たる教員の養成を目的とするという認識が大学の教員の間に共有されていない」、「学校現場が抱える課題に充分対応した授業ではない、指導方法が講義中心、教職経験者が授業に当たっている例も少ないなど、実践的指導力の育成が十分でない

こと」と指摘されている。これには議論があるだろう。大学の学術研究は1年、3年、5年等の長いスパンの研究を教えるものであり、1分（1日）、3分（3日）、5分（5日）で答えを出さないといけない教育現場における課題解決のされ方とは大きく性質が異なるわけである。つまり、大学の学術研究は、目まぐるしくてスピード感のある教育実践とはどうしても乖離しがちになる。そうした間隙を埋めるために教育実践演習（注6）があるわけだが、ここでは触れる紙数はない。

こうした指摘は5年前になされたものだが、森チルでは「学生に身につけさせるべき資質能力」や「実践的指導力」の内容を吟味しながら指導してきた。本稿で何度も出てくる「具体的支援方法」とは、特別支援教育の中でよく使われる用語概念で、「実践的指導力」とほぼ同じ意味である。例えば、考察で述べたノートづくりで120項目をまとめたとなると120項目の具体的支援方法が身につく事が想定でき、現場での実践的指導力とつながる。教育現場に行っても想定外の教育課題はほぼなくなる。ここまでしておけば、教師力の基盤は一応できると考えている。本格的な子ども理解、アセスメント（実態把握、分析、評価等）、学級経営、集団づくり、授業づくり、教材づくり、教科毎の本質の追及等の教育実践の本格的な展開は、これを前提として成り立っていくと私は考えている。実際、私は教採合格後もこうした事項の質問や疑問を手紙、Fax、学級通信や指導案の送付というかたちで受け、アフターケアとして援助している。なぜなら、次世代の教育と教員養成は国家的目標となっているからである。和歌山大学の山本健慈学長は「さらに『生涯あなたの人生を応援します』という標語を掲げ、卒業後再就職や再入学などの相談に乗っている。学生が幸せであるために、学生が障害を通じて伴走する覚悟だ」と述べている（『朝日新聞』2011年10月7日付、「大学サバイバル 国立編」）。

これも1つの試みなのであろう。佛大縁コミュニティによる「離脱者ゼロ計画」（21年度報告書）のなかにも、似た構想を考えるゼミがみられる。

エ、自己の分析、自己の生い立ち上での「屈折体験」「挫折」等の整理

学生が教師になるために自分の資質、能力、適性を整理し、長所と短所を把握し、その後の自己の新たな展開を進める事はどの学生にも求められる。自分が熱血教師タイプであるとすれば、逆に、冷静さを必要とする指導場面もあるなどということは普通のことである。しかし、「屈折体験」や「挫折体験」があり、それを引きずりながら教職に就こうとするケースもある。ある学生の手記には、「今では決して珍しいことではありませんが、両親が不仲、父親はアルコール依存症、毎日怒鳴り声が響き、暴力のある家庭で育ちました。子ども時代、学校は唯一安らぐ事ができる場所、先生と友人はなんでも話せる心許せる人でした。——以下略——」と教師になろうとした動機を述べた例もあった。この学生は、そうした生い立ちの屈折体験を整理し、悪い事例は反面教師にして良い家庭を持ち、熱血かつ心優しい教師として2年目の教職人生を歩んでいる。学級通信が1ヶ月ごとに私の所に送られてくるが、かつての出来事はトラウ

マになっていない感があり、生い立ちの屈折経験には整理がつけてられている。通信教育部学生の教育実習や介護体験実習でうまくいかないとか、トラブルがあったケースには、その裏に会社の首切りによるショック、不登校体験歴、引きこもり、うつや神経症状、大学中退歴、発達障害（の疑い）、体調の長期の不良、ある事件や出来事による PTSD（心的外傷後ストレス障害）の存在等のあるケースも多かった。多くは今後の人生への見通しが持ちにくく、自己肯定感や自信が著しく低下していた。こうした場合、実習や学習の進め方に対する助言と共に、心理的支援が必要であった。実習中の学生にも現役学生の森チルのなかにも、5 時間程度も相談に乗ったことが何回かあった。

オ、教採受験勉強によるストレスの抜き方への助言

これについては、「2.2 事例（手記）の分析」の 8 で詳しく述べた。教採の勉強は、時には「朝から晩までの勉強」が求められる。勉強を強いる。そうすると、ほとんどの学生に吐き気や手のしびれ、咳等の身体症状が出てきていた。こうした事への対処行動の助言も必要になる。教師になった時、今、教育現場の困難化および多忙化が進むなかで、メンタルヘルスの方法を持つ事は今後の教職人生にも役に立つであろう。全ての学生に私の助言やカウンセリングを含めた支援と援助は効果がみられ、改善に役立った。

カ、良い教師をめざす情意性、精神性をつけること

教師（公立等）には「サラリーマン性」、「労働者性」、「公務員性」、「専門職性」、「奉仕者性」「職人性」等の様々な側面がある。もし教師を安定した職業とのみとらえ、それを主な動機として教職に就き、専門職性、奉仕者性等にあまり注目しないとすれば、およそどの程度の教師になれるのか、教育実践を進めるのかは知れている。森チルでは教採に合格して教師になることを教えてきたが、伏線として 1 年、2 年の学習のなかで、最終的には良い教師（理想の教師像）をめざし頑張っていくというスピリッツをつけてきた。18 枚（人）の教採合格奮闘記のすべてに「こんな教師像をめざします」の言葉があるのがうれしい。

4. おわりに

以上のように、教師力の基盤づくりに関わって教師塾（「森チル」）の成果と課題を整理してきて思うのは、一人の教員（私）でも持続的な実践を展開すれば、かなりの可能性が生まれるという事である。そのためには、教職支援センターの講師（教員）には、一定の指導力量と研究の姿勢がいる事を感じ続けてきた。指導者の主体形成である。一つには、自己の 30 数年間の教育現場における教育実践を臨床教育学的視点で整理しなければならない。何故なら、教育現場の営みは「個別性」（子どもと教師と学校の違いによる差）、「偶然性」と「意図性」、「歴史性」（現代的意味）、「地域性」（地域と文化の違いによる差）が含まれているからである。その

なかで、教育の過去・現在・未来のあり方、不易と流行の区別、教育の原理・原則を考え、現代の学生に何をこそ伝えるべきかについて研究と整理がいる。二つには、大学の教職科目を中心とする学問内容への一定程度の理解がいる。大学での講義内容を理解したうえで「教育現場体験」のエッセンスを学生に付与すると有効性が増すのであった。三つには、大学生の生活実態の把握、特に勉学態度、意識への理解、思考様式、思考回路の理解が大切である。面談や教師塾、部分的な講義といっても、教育に必須のこの条件（受け手への理解）が必要になると考えられる。5年間佛教大学に勤め本年度で定年になるが、多くの学生に影響力の行使が出来たと満足している。その分、次世代の教師づくりや教育の質的向上に一定の貢献ができたと考ええる。私的な表現で言うと、学生の心の深い所に影響を与える「魂の職人としての教育実践」の創造ができたのであった。

この正月、森チルのメンバーの卒業生（若手教員）から年賀状が複数届いた。そのなかで、ある教師（関東方面2年目）は「——前略——今年は高等部3年生の進路担当となり、忙しいながらも充実した社会人生活です。生徒の進路もほぼ決まり、あとは卒業に向けてたくさんの愛を伝えていきたい3学期です。障害を持つ子どもたちと、その保護者と日々関わる中で、やはり彼らの底知れぬ魅力にひかれるばかりです。——中略——私は本当に幸せものだと思います。私が特別支援学校の先生になれたのは、他でもない森田先生のおかげです。先生、私は元気です。どんなに遠くても変わらない絆をいくつも支えにしながらも頑張っていきたいです。また、食事に行ける日を楽しみにしています」と、長文の年賀状を届けてくれた。「本当に“幸せものだと思います”」の言葉が私を元気づける。それは学生を幸せにした分だけ、私も幸せになれると考えてきたからである。佛教大学での教育実践と研究を基礎に、他大学へと実践や講義の場を移しても、私は「教師 魂の職人であれ」の座右の銘のもとに頑張っていけると考えている。

〔注記〕

注1 青年期の発達課題について、『発達課題』の考え方をはじめて提唱したハヴィガースト（1900-1991）は、青年期の発達課題として、①問題解決能力の発達、②仲間との成熟したつきあい、③倫理体系の発達、④社会的に責任ある行動、⑤身体の有効な利用、⑥経済的自立の準備、⑦親からの情緒的独立 ⑧結婚・家庭生活の準備の8つを挙げている。

注2 インサイド・アウトによる生き方（就職活動等）について、『やりたいこと』や『将来の目標』を基準として人生形成を図ろうとする現代の大学生の生き方の傾向を『内から外へ』という意味で「インサイド・アウト」と呼ぶ。逆に、将来の目標を実現するために、大学を選んだのではなく、『より上級の学校へ』『二流よりは一流へ』とかの基準で選ぶ傾向、就職においても収入、社会的地位等の条件を中心に考える生き方を『外を基準としてうちを形づくる』という意味で「アウトサイド・イン」と呼ぶ。溝上慎一は『現代大学生論』

(2004) のなかで『たしかに新しい時代のインサイド・アウトによる生き方がある。それは、自分のやりたいことや将来の目標をもとに堂々と可能性にチャレンジできる一方、脆さ、危険をも他方で併せもつ。』と述べている。

注 3 TEACCH プログラムとは、Treatment and Education of Autistic and related Communication-handicapped Children の略である。自閉症及び関連領域のコミュニケーションに障害を持つ子どもたちの治療と教育であり、社会の中で有意義な暮らし、できるだけ自立した行動が出来るように支援することを目的としたプログラムである。特別支援学校ではこうした考え方にに基づき、自閉症スペクトラムの児童生徒一人一人の障害特性への理解、個人差への配慮、一人一人のニーズの把握をアセスメントし、個別の指導計画を作成し教育実践している。授業等の中で、モノ、施設設備、ハード面での構造化、視覚支援によるコミュニケーションの工夫、スケジュールの明示、感覚過敏への対応等を取りられているのは、こうした考えの具体化である。

注 4 PECS とは、The Picture Exchange Communication System の略、絵カード交換式コミュニケーションシステムのことである。1985 年にアメリカのデラウェア州にて開発され、『デラウェア州自閉症プログラム』で使用されてから、世界に広がった技法である。コミュニケーションの障害のある人に、自発的なコミュニケーションを教えるための指導方法、代替え、拡大コミュニケーションの 1 つ。特別支援学校の教師の中でも講習会の参加者、自立活動（療育）担当者が中心となり、徐々に広がりつつある。

注 5 「教育用語ノートづくり」について、「②学生の頭の中に、教採に必要な知識・理解・教育臨床教育学に関わる知識、理解（記憶）の『引き出し』、『ユニット』、『パーツ』を積み上げていく。具体的には『ノートづくり』でおこなうのであるが、それぞれの項目には、必ず子どもの状態像・具体的支援方法を加えさせている。『教育辞典・事典』的理解（専門性）と教育現場での教育実践・実践的指導力につながる基礎力をつけていく」とある（森田 2011）。学生がノートに具体的支援方法等を加筆修正していくと、その学生オリジナルの 100 項目程度の教育課題解決のコンパクトな指導法事典ともなる。

注 6 中央教育審議会答申（平成 18 年）『今後の教員養成・免許制度の在り方』の中で提唱され、新たに必修科目、2 単位となった科目。内容としては下記のように規定されている。『当該科目には、教員として求められる事項（①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項 ②社会性や対人関係能力に関する事項 ③幼児児童生徒理解や学級経営に関する事項 ④教科・保育内容等の指導力に関する事項）を含めることが適当。』また、『役割演技（ロールプレーイング）やグループ討議、事例研究、模擬授業等により実施すること』等を例示している。教育現場の求める『即戦力の力』『実践的指導力』を付けるのに、どのように結びついていくか今後の大学教員の実践開発が、期待されている。

〔参考文献〕（五十音順、以下同）

朝日新聞 教育チーム、**2011**、『いま、先生は』岩波書店
安西祐一郎、**2011**、『心と脳』岩波書店
飯田史彦、吉田武男、**2009**、『スピリチュアリティ教育のすすめ』PHP
伊藤氏貴、**2010**、『奇跡の教室』小学館
大塚俊男・上林靖子・福井進、丸山晋、**2003**、『こころの病気を知る事典』弘文堂
斉藤清治・西村優紀美・吉永崇史、**2010**、『発達障害 大学生支援への挑戦』金剛出版
斎藤孝、**2008**、『斎藤孝の学び力』宝島社
坂井克之、**2009**、『脳科学の真実』河出書房新社
佐藤学、**2010**、『教育の方法』放送大学業書、左右社
橘木俊詔、**2011**、『いま、働くということ』ミネルヴァ書房
辰野千寿、**2006**、『学び方の科学』図書文化
苫野一徳、**2011**、『どのような教育が『よい』教育か』講談社選書メチエ
佛教大学教職支援センター、**2012**、『教職支援センター紀要、第2集』佛教大学
森田薫・原清治、**2009**、『教師 魂の職人であれ』ミネルヴァ書房
鷲山恭彦、**2011**、『知識基盤社会における教員養成と人間形成』学文社

〔引用文献〕

斉藤孝、**2007**、『教育力』岩波書店
鈴木謙介、**2012**、『SQ “かかわりの知能指数”』Discover
藤井直敬、**2009**、『つながる脳』NTT出版
柳谷晃、**2009**、『教師の品格』阪急コミュニケーションズ
読売新聞教育取材班、**2009**、『教育ルネサンス 大学の実力』中央公論社

〔引用記事〕

内田由紀子、**2012**、「識者に聞く（下）」（『毎日新聞』**2012**年**1**月**18**日付）
菅原祐美子、**2012**、「春から教員 試練を糧に成長」（『朝日新聞』**2012**年**1**月**21**日付）
山本健慈、**2011**、「大学サバイバル、国立編 和歌山大」（『朝日新聞』**2011**年**10**月**7**日付）